

李白文集序の詩人像

乾

源

俊

はじめに……………	二九
一 魏顥序と李陽冰序の詩人像……………	三三
二 李白の自己像……………	三〇
三 序の詩人像と詩作品……………	三九

はじめに

ひとくちに詩人像と言っても、さまざまな要素を含みうる。詩文から感受される書き手の個性や為人、本人の身上にかかる個別具体的な事情、あるいは外見的特徴、等々。また詩作品を読んだときに読者のなかに喚起される書き手の像であるという意味においては、読みこみの度合によって、情報の取捨によって多様な偏差を生じうる。一方でそれとは別に、作者本人が示そうとする自身の像がある。われわれが書き手の像を思い浮かべやすい詩人として、李白のほかにも、さきには陶淵明、同時代には杜甫が思いあたる。その理由のひとつに、彼ら自身が自己像の創出能力に秀でていたということがあるのではないか。そのように捉えて、まずは「彼自身による李白像」を対象として考察を行うこととする。それは詩作品、文集序における自伝的な記述、自身の呼称をめぐるエピソード等、さまざまなレベルにおいて見られる。それらは詩人本人から出ていることからすれば、当人にかかるなにがしかの真実を映している。とはいえ、映像とは現実からなにがしかを差し引いたものであるということからすれば、真実そのものではない。いわば虚と実のあいだに結ぶ像である。詩人の示した像は、ひとまず受け手のなかでおなじ像を結んだとしても、そこに含まれる虚実真偽をめぐって、際限のない探索が新たに始まる。こうした事情は、李白文集序の記述をめぐる論説によくあらわれる。

考察にさきだち、詩人像の役割、文集序の詩人像成立の要件などについて、少し整理しておく。われわれはふ

つう詩を読んだとき、書いたひとのことに思いを致す。そこで得た印象をもとにさらに読み進めてゆく。詩人像の役割は、作品の帰属先であり、詩作品が集められ文集となれば、詩の集合体としての統一性を保証していることになる。その成立は、詩に署名が施された建安期以降のことと、とりあえず言える。しかしそれ以前、後漢の無記名の詩、「古詩十九首」等にも作者像の想像できるものがある。とするとそれは「作者」の定義にかかわる。よりひろくとらえるならば、詩のなかにあらわれる固有の思考、スタイル、エクリチュールなどに還元される。これらはいわばテキスト内部の作者ということになる。ここで言う作者はもう少し限定された意味であり、すなわちテキストの外部に具体的な形象をとまって展開された、もしくはそのようなものとして想像することが可能な人物像のことである。

これがどのように形成されたか。成立の要件に、詩が個人のものとなること、詩の自己言及性が定着することが挙げられる。前者は、書き手の個別的な事情を書きこむ書き方が成立すること。後者は、『詩』の「志を言う」伝統が五言詩に受け継がれ、政治的な抱負、経世済民の意志を述べる。転じて轆轤蹉跎を嘆く、あるいは帰隱の志向を述べる。などのことである。前者は樂府から古詩への移行、後者は魏晉の五言詩発展に対応するが、さしあたりの作業仮説であり、厳密に歴史的経緯を反映したものではない。ともかく個人の集に集積されるのはこのような要件を踏まえてできあがった制作物であるということだ。文集の序に記された伝記的記述は、人生の閱歷のなかで折々に書かれた作に先後をつける目安となる。拾われた詩がしかるべく配列されることの根拠となり、詩の読解に情報を与える。そこに詩人像があらわれているとすれば、詩を一定の方向に読めという指標を示していることになる。また、その像にふさわしく詩が選ばれ、配列されるということが行われている。これらはことさ

らな仕業であり、作為をとまなう。

一 魏顥序与李陽冰序の詩人像

詩人像とは、ふつう読者が詩を読んで思い浮かべるものを指して言う。これに対して文集序の詩人像が異なるのは、それを描く筆者が当人にじかに接していること。テキストのみならず、生きた本人から外貌や為人その他さまざまな情報を得ていることである。これはわれわれを含む、後人が絶対的に及ばないところである。李白の文集は生前に二種が編まれ序が遺る。魏顥「李翰林集序」と李陽冰「草堂集序」。それぞれにどのような詩人像が描かれるのか。違いは何か。この点から見てゆく。

ふたつの序は、宝応元年（762）頃、前後して書かれた。魏顥序の方がやや早いことが、「上皇」「上元末」「白未絶筆」等の記述から推察される。李陽冰序は「時宝応元年十一月乙酉」と制作期日を明記する。魏顥は天宝十三載（754）李白に会った。彼は李白のファンであり、江東から天台、広陵へと追いかけてようやく会うことができた。そのときの李白の風貌について、眼光鋭く餓虎の如きも、ときに束帯して風流蘊藉な様子であったと。また道士として青綺冠帔を帯びたいでたち等にも言及している。

顥始名万、次名炎。万之日、不遠命駕、江東訪白。游天台、還広陵見之。眸子炯然、哆如餓虎、或時束帯、風流蘊藉。曾受道錄於齊、有青綺冠帔一副。……

〔李太白文集〕卷一

叙述は、序の書き方の定式に従って、（一）出自、（二）文学の評価、（三）キャリア、（四）文集編纂の経緯と展開する。その基幹となる部分を取り出せば、（一）隴西李氏であり蜀で生まれた、（二）文学の伝統が六経から離騷、建安七子を経て李白に受け継がれ、やわらかで約やかな情理と麗しい詩句にすぐれる、（三）元丹丘とともに持盈法師によって推薦され翰林に入った、張垚の讒言によって逐われた、（四）李白と会ったとき詩文を渡され編纂を託されたが、安史の乱のなかで亡失、上元末年（761）偶然これを得た、李白との応酬詩を冒頭に大鵬賦・古楽府諸篇を続ける、李白は存命であり制作は続いている、等々となる。

（一）……白本隴西、乃放形、因家於綿。身既生蜀、則江山英秀。

（二）伏羲造書契後、文章濫觴者六経。六経糟粕離騷、離騷糠粃建安七子、七子至白。中有蘭芳、情理宛約、詞句妍麗、白与古人爭長。三字九言、鬼出神入、瞠若乎後耳。

（三）白久居峨眉、与丹丘因持盈法師達、白亦因之入翰林、名動京師。……許中書舍人、以張垚讒逐、游海岱間。

……

（四）顯生平自負、人或為狂、白相見混合、有贈之作、謂余「爾後必著大名於天下、無忘老夫与明月奴」。因尽出其文、命顯為集。顯今登第、豈符言耶。……経乱離、白章句蕩尽。上元末、顯於絳偶然得之、沈吟累年、一字不下。今日懷旧、援筆成序、首以贈顯作、顯酬白詩、不忘故人也。次以大鵬賦・古楽府諸篇、積薪而録。文有差互者兩举之。白未絶筆。吾其再刊、付男平津子掌。其他事跡、存於後序。

出合いのことは(三)、宮廷に出仕した記事の後に続いて述べられる。それが天寶十三載であることは、以下の「解携明年、四海大盜」、別れた翌年に安祿山の乱が勃発した、という記述からわかる。五月に広陵で会った後、同舟して秦淮により金陵へ赴き、秋に同地で別れるまで、交友は数月に及んだ。別れに際して李白が贈った「送王屋山人魏万還王屋」詩と、応えた魏顥「金陵酬翰林謫仙子」詩によって詳細が知れる。前者は魏顥が李白に会うまでの行跡を、序には「王屋山人魏万云、自嵩宋沿呉、相送数千里不遇、乘興遊台越、經永嘉、觀謝公石門、後於広陵相見。……(一作見王屋山人魏万云、自嵩歴兗、遊梁入呉、計程三千里、相訪不遇、因下江東。尋諸名山、往復百越、後於広陵一面、遂乘興共過金陵。……)」(卷14)と、詩には百二十句にわたり委曲を尽くして、それぞれ描いている。後者は、魏顥が王屋山を出たのは前年秋、梁園から東魯の居へと尋ねたが愛子伯禽に遇うのみ、江東へと向かったなどの情報も含んでいる。(四)文集編纂を依頼する際、李白は「あなたは後に天下におおきな名を著すだろう……」と言い、いまそのとおり科挙に登第したなど、編者自身がやや前面に出てくる感がある。魏顥序の特徴は、エピソードの類が豊富であること。上述(三)(四)の省略部分は、都合十四の話題によって埋められる。そのうち三つは李陽冰序にも見える。b 謫仙人の話、g 授籙のこと、i 謝安に自身をなぞらえたこと、である。他の十一は魏顥序にのみ見える。a 大鵬賦が家ごとに所蔵された。c 上皇(玄宗)に召され半酔状態で出師詔を書き上げた。d 五十余にして禄位なし。e 出合いの経緯。f 初対面の印象。h 遊俠者としての顔。i 急死した友人を葬った話。j 韓荊州に拝礼の仕方を間違え「酒が礼をなす」と言った話。k 四度の結婚と子供たちについて、家庭の詳細。m 飲酒と服薬、李白が杯を挙げるや皆愉快な気分になったこと。n 安史の乱について、永王璘の挙兵に参加し罪に問われたことの顛末、等々。外貌についてや、結婚と家庭の状況については、こ

ここにしか見えない貴重な情報となっている。

(三) …… a 大鵬賦時家藏一本。 b 故賓客賀公奇白風骨、呼為謫仙子、由是朝廷作歌數百篇。 c 上皇豫游召白、白時為貴門邀飲。比至半醉、令制出師詔、不草而成。 …… d 年五十余、尚無祿位。祿位拘常人、橫海兀負天鵬、豈池籠采之。

e 顓始名万、次名炎。万之日、不遠命駕、江東訪白。游天台、還広陵見之。 f 眸子炯然、哆如餓虎、或時束帶、風流蘊藉。 g 曾受道籙於齊、有青綺冠帔一副。 h 少任俠、手刃數人。 i 与友自荆徂揚、路亡、權窆回棹、方暑、亡友藥潰、白収其骨、江路而舟。 j 又長揖韓荊州、荊州延飲、白誤拜、韓讓之、白曰「酒以成礼」、荊州大悅。 k 白始娶於許、生一女二男、曰明月奴、女既嫁而卒。又合於劉、劉訣。次合於魯一婦人、生子曰頗黎。終娶於宋。 l 間携昭陽、金陵之妓、跡類謝康樂、世号為李東山。 m 駿馬美妾、所適二千石郊迎、飲數斗、醉則奴丹砂、撫青海波。滿堂不樂、白宰酒則樂。

(四) …… n 解携明年、四海大盜。宗室有潭者、白陷焉、謫居夜郎。罪不至此、屢經昭洗、朝廷忍白久為長沙、汨羅之儔、路遠不存、否極則泰、白宜自寬。吾觀白之文義、有濟代命、然千鈞之弩、魏王大瓠、用之有時。議者奈何以白有叔夜之短。儻黃祖過禰、晋帝罪阮、古無其賢、所謂仲尼不仮蓋於子夏。 ……

ここに書かれているのは、平生の李白の様子であり、親しく接した友人から見た、等身大の詩人の姿である。それは酒・女性・友情・道教などの要素に彩られている。

対して李陽冰序の方かどうか。全文を掲げ、訳文を付す。

(一) 李白、字太白、隴西成紀人、涼武昭王暠九世孫。蟬聯珪組、世為顯著。中葉非罪、謫居条支、易姓為名。然自窮蟬至舜、七世為庶、累世不大曜、亦可歎焉。神龍之始、逃歸于蜀。復指李樹而生伯陽。驚姜之夕、長庚入夢、故生而名白、以太白字之。世稱太白之精、得之矣。

(二) 不說非聖之書、恥為鄭衛之作。故其言多似天仙之辭。凡所著述、言多諷興。自三代已來、風騷之後、馳驅屈宋、鞭撻楊馬、千載獨步、唯公一人。故王公趨風、列岳結軌、群賢翦習、如鳥歸鳳。盧黃門云「陳拾遺橫制頽波、天下質文、翕然一變」。至今朝詩體、尚有梁陳宮掖之風。至公大變、掃地併盡、今古文集、遏而不行。唯公文章、橫被六合、可謂力敵造化歟。

(三) 天寶中、皇祖下詔、徵就金馬。降輦步迎、如見綺皓。以七寶牀賜食、御手調羹以飯之。謂曰、「卿是布衣、名為朕知。非素畜道義、何以及此」。置于金鑾殿、出入翰林中。問以國政、潛草詔誥、人無知者。醜正同列、害能成謗。格言不入、帝用疎之。公乃浪跡縱酒、以自昏穢。詠謠之際、屢稱東山。又與賀知章・崔宗之等、自為八仙之遊、謂公謫仙人。朝列賦謫仙之詞、凡數百首、多言公之不得意。天子知其不可留、乃賜金帛之。遂就從祖陳留採訪大使彥允、請北海高天師授道籙於齊州紫極宮。將東歸蓬萊、仍羽人駕丹丘耳。

(四) 陽冰試絃歌當塗、心非所好、公遇不棄我、扁舟而相歛。臨當挂冠、公又疾痼、草稿萬卷、手集未修、枕上授簡、俾余為序。論閨雎之義、始愧卜商、明春秋之辭、終慚杜預。自中原有事、公避地八年、當時著述、十喪其九、今所存者、皆得之他人焉。時、寶應元年十一月乙酉也。

(卷一)

(一) 李白は字が太白、隴西成紀の人、涼の武昭王暠の九世孫である。代々官職にあずかり、世に顕れていた。中ごろの年代に罪ではなく、条支に流謫され、姓を変えてなつた。こうして窮蟬から舜まで、七代のあいだ庶人であつたようなものであり、代々活躍しなかつたのは、また嘆かわしいことだ。唐の神龍年間の始め、蜀に逃げ帰つた。もどおり李の樹を指して伯陽が生まれた。臨月の夜、金星が夢に入り、ゆえに生まれて白と名づけ、太白を字とした。世に「太白の精」と称するのは、当を得ている。

(二) 聖賢の著述でなければ読まず、鄭風衛風のような歌を作ることゝ恥とした。だからそのことばは仙人の辞に似ている。およそ著述には風刺や比興が多い。夏商周の三代以来、詩経と楚辞のあと、屈原や宋玉を駆りたて、揚雄と司馬相如に鞭をあて、千年をひとり歩むほどの文学者は、ただ李公ひとりである。それゆえ王侯貴族はすみやかな風のように、四方の諸侯は轍をおなじくし、多くの賢者がひしめくさまは、鳥が鳳凰につき従うようだ。黄門侍郎盧藏用は言った、「右拾遺陳子昂はくずれた波を引き止め、天下はこれに従い、文学のあり方は一変した」と。わが唐朝に至つて詩のスタイルには、なお梁陳の宮体の風があつた。李公に至つておおきく変化し、風潮は一掃され、近現代の文集は、遮られて行われなくなつた。ただ李公の文学は、宇宙を覆い、力は造物主に匹敵すると言ふべきか。

(三) 天宝年間に今上皇帝の祖父（玄宗）は詔を下し、徴して金馬門に控えさせた。車より降りみずから歩いて迎え、四皓の綺里季を見るようであつた。七宝の長椅子を設えて食事を用意し、御手もて羹を調味し食べさせた。謂われることには「そなたは布衣の身にして朕の知るところとなつた。平生より道の奥義を蓄えていなければ、どうしてこのようなことがありえただろうか」と。かくて金鑾殿に置き、翰林院に出入りさせた。国政を問い、秘かに詔誥起草させたが、知る人はいなかつた。正直なることを憎む同僚が、才能ある者を傷つけ誹謗した。格しいことばは容れら

れず、帝はこれを疎んじた。李公はさまよい飲んだくれ、酔いつぶれた。詠歌の際には、しばしば東山と称し謝安に比した。また賀知章や崔宗之らと、みずから任じて「八仙の遊び」をなし、李公を「謫仙人」と呼んだ。朝廷の群臣が謫仙の歌を賦すこと、およそ数百首、李公が志を得ないことを述べるものが多かった。天子はもはや引き留めることができないのを知り、そこで報奨金を賜い放還した。かくて族祖の陳留採訪大使李彦允をたより、北海の高天師に請うて道録を齊州の紫極宮にて授かった。東のかた蓬萊に帰し、仙人につき従おうとしたのである。

(四) わたくし李陽冰は当塗に県令となったが、内心悠悠として気が進まなかった。李公は遠いところわたしを見捨てず、ひとひらの舟で歡樂した。離任に際して、李公は病篤く、草稿万巻、みずから未編のまま、枕元で手稿を託され、わたしに序を作らせた。関雎の義を論ずるには、子夏にはずかしい、春秋の微言を明らかにするには、杜預にはじいる。中原に事が起こってから、李公は避難して八年、当時の著述は、十に九がうしなわれ、いま存するのは、みな他人から得たものだ。ときに、宝応元年十一月十日。

一見してわかるように、こちらはエピソードの類が削られ、その一方で出自やキャリアにかんする基幹事項の記述が大幅に増えている。(一) 出自について、隴西李氏というだけでなく、涼武昭王暕九世孫である。途中で条支に謫居し姓を易えた。唐の神龍年間初に蜀に帰還した。生まれるにあたり李姓に復した。金星が母の夢に入った。(二) 入宮について、玄宗が詔し、召して金馬門に控えさせた。迎えられたとき、玄宗は四皓の綺里季を見るようであった。親しく食事を賜り、おことばを賜った。翰林院に配された。同僚の讒言によって宮廷を逐われた、等々。

比較

（一）

魏序「白本隴西、乃放形、因家於綿」

李序「李白、字太白、隴西成紀人、涼武昭王暠九世孫。蟬聯珪組、世為顯著。中葉非罪、謫居条支、易姓為名。然自窮蟬至舜、七世為庶、累世不大曜、亦可歎焉」

魏序「身既生蜀、則江山英秀」

李序「神龍之始、逃歸于蜀。復指李樹而生伯陽。驚姜之夕、長庚入夢、故生而名白、以太白字之。世稱太白之精、得之矣」

（二）

魏序「白久居峨眉、与丹丘因持盈法師達、白亦因之入翰林、名動京師」

李序「天寶中、皇祖下詔、徵就金馬。降輦步迎、如見綺皓。以七宝牀賜食、御手調羹以飯之。謂曰、「卿是布衣、名為朕知。非素畜道義、何以及此」。置于金鑾殿、出入翰林中」

魏序「許中書舍人、以張垧讒逐、游海岱間」

李序「問以國政、潛草詔誥、人無知者。醜正同列、害能成謗。格言不入、帝用疎之。……天子知其不可留、乃賜金帛

之」

つまり、魏顥序で本貫と出生地のみ記していたのが、李陽冰序では家勢浮沈と流離の状況を補足、また出生と復姓を老子出生譚や金星入夢の話など、神秘のベールに包む。入宮の経緯につき、魏顥序で推薦者玉真公主と友人元丹丘の名を挙げていたのが、李陽冰序では玄宗の下詔と謁見、賜食と御詞と、主上との親しい関係を言う。讒言について、魏顥序が張垚の名を挙げていたのに対し、李陽冰序では正しく才能ある者を憎む同僚と、婉曲な表現になっている。

その他、(二) 文学の評価では、魏顥序は、六経から離騷、建安七子を経て李白に伝統が伝わり、やわらかで約やかな情理と麗しい詩句を備えたと。儒家經典を則とする文学觀、詞藻表現を重んずる文学觀の折衷による評価がなされていた。これに対し李陽冰序は、詩経離騷の跡を承け、賦の作家を鞭撻し千載に独歩すると。また盧藏用の陳子昂評を踏まえて、近古の浮華な文学を一掃したと。復古文学史觀を色濃く反映した評価となっている。聖賢の書でなければ読まず、鄭衛スタイルの作詩を恥とした、聖人のごとき詩人像。「天仙の辞」「諷興」に特徴づけられた文学。これらが盛唐期復古主義の主張に支えられている。ということにも併せて気づかれる。

なぜこのような書き方がなされるか。理由は(四)の内容にかかわる。編纂の経緯は、李陽冰が当塗県令のとき李白が身を寄せた。そこで危篤に陥り草稿を託して序を請うた。李白が持っていた原稿は安史の乱後に他者から集めたものという。魏顥序が元氣であった五十四歳の李白を写しているのに対し、李陽冰序は当時六十二歳、いま臨終の床にある李白の模様を写している。前者が生き生きとした活力ある姿であるのに対して、後者は人生

の終焉にあたり、経歴をふり返る口調が反映しているのであろう。このようであった、というより、こうあったかっただけの人生の記、という印象である。前者がさまざまなエピソードにより人物の多様な面を映す、いわば生の豊饒さを言うのに対し、後者は本人によってかくありたいと願われた自己像を反映する、とも言えようか。より単純には、他者が見た像と自己像のギャップである、とも。

李陽冰序の記述でもうひとつ重要な情報は、「宝応元年十一月乙酉」という期日の表記である。同年四月に上皇玄宗が薨じている。月内に肅宗も崩御。さらに玉真公主も宝応時に死去した（『新唐書』巻83玉真公主伝）。この自身によるバイオグラフィーは人生の最も光輝ある場面として玄宗との親しいやりとりを中心に構成されている。自身を引き立ててくれたその恩人がみまかった。自身もいま篤き病の床にある。あたかも主に殉ずるように。李白は万感の思いをこめてこの人生の記を語っているのであろう。自身のキャリアは玄宗との出会いによって形成された。その事実があり、いま目前の死という現実があつて、主上に親しく接した場面を思い起こすとき、ことは理想化され、甘美な記憶として甦ってくる。これに輪をかけるように、家系と出生をめぐる物語が付け加えられる。このように自伝的記述が形成されていると考えるとよい。

二 李白の自己像

ふたつの序はいずれも他者によって描かれた詩人像を伝えるが、とくに李陽冰序の方は李白本人の語る自己像が李陽冰の筆をとおして書かれている、という趣が濃い。「語る」ということは、「偽」を含むことでもあ

る。従来の研究史において、本人の語る出自の「偽」が暴かれてきた。先鞭を付けたのは陳寅恪である。彼は李陽冰序と范伝正新墓碑序その他を材料に、李白は西域生まれの胡人の出であるとした。一方、A. ウェイリーは李白の先祖が流刑者である可能性について考え、「碎葉」か蜀への帰路で生まれたとした。これが小川環樹によって引用されて、現在に至るまで有力な仮説となっている。

研究史①

(一) 出自・出生

李陽冰序のほか、范伝正「唐左拾遺翰林学士李公新墓碑序」が主要な資料である。これは元和年間に范伝正が李白孫女から得た、長子伯禽の手疏に基づく。

公名白、字太白、其先隴西成紀人。絶嗣之家、難求譜牒。公之孫女搜於箱篋中、得公之亡子伯禽手疏十数行、紙壞字缺、不能詳備。約而計之、涼武昭王九代孫也。隋末多難、一房被竄於碎葉、流離散落、隱易姓名。故自国朝已来、漏（底本作「編」、今拠『文苑英華』卷945『全唐文』卷614改）於属籍。神龍初、潜還広漢。因僑為郡人。父客、以逋其邑、遂以客為名。高臥雲林、不求禄仕。公之生也、先府君指天枝以復姓、先夫人夢長庚而告祥、名之与字、咸所取象。

……

（卷一）

陳寅恪は李白の出自に疑義を提出する。至徳二載（757）に書かれた李白「為宋中丞自薦表」に「前翰林供奉李

白年五十七」とあり、生年は武后の大足元年（701）、一家が西域から蜀に帰還した神龍元年（705）には五歳、したがって西域生まれであろう。父の名「客」から、もともと漢人ではなく西域の胡人であろう、隋末に西域に竄み寄せられたというのも事実ではなく、李姓に復したことも隴西李氏であるとするのも偽称であろうと（「李太白氏族之疑問」『李白研究論文集』、原載『清華學報』第10卷1期）。

詹鍔はこれに論証を加える。李白が同姓のひとに会うたびに兄弟叔姪と呼ぶのは、同姓を理由に親族関係を連ねてゆく「聯宗」の習慣による。その家系が確かであれば天宝元年（742）七月二十二日の詔「自今已後、涼武昭王孫室已下、絳郡・姑臧・敦煌・武陽等四公子孫、並宜隸入宗正寺編入屬籍」（『唐會要』卷6）により屬籍に編入されていてもよいが、范伝正序には「漏於屬籍」と言う。隴西李氏は「高自標榜」自身を高く見せるため、年齢を重ねてから称するようになったもの。隴西成紀は唐代においては郡望の通称であり、必ずしも宗室に繋がる意識されていたわけではない、等々（「李白家世考異」『李白詩論叢』）。

ウェイリーは、李白の先祖が隋末に西域に竄みされたという伯禽手疏に出る話が事実である可能性を考える。曾祖父は隋の大業五年（609）ロプノル湖とココノル湖の間の土地へ送られた流刑者であり、唐の咸亨元年（670）に吐蕃の侵攻に遭い「碎葉」スイヤブへと到った。そこには王方翼が調露元年（682）に城塞を築いていたが、永淳元年（682）突厥の族長が独立を宣言、祖父と父は捕虜の身分で生活した。神龍初年父が密かに蜀へと帰還。李白の出生はスイヤブか帰路のなかであろうと（『李白』177―179頁）。

小川環樹はウェイリー説を『唐代の詩人』序説の注（22頁）に採用、爾來有力な仮説となっている。

考察

隴西李氏を額面どおり受けとる必要がないとしても、李白の側にはそう称するだけの理由がある。それは何か。李陽冰序「隴西成紀人、涼武昭王暠九世孫。蟬聯珪組、世為顯著。中葉非罪、謫居条支、易姓為名」とは、もと貴顕の系統であつたものが、途中で庶人に落ちた、姓も変えたと。栄光から一転、苦難の時代を過ごしたことを言う。この書き方自体が唐室のものと極めて似る。唐室は涼武昭王暠の子・歆が沮渠蒙遜に滅ぼされ苦難の時代を過ごす。一方で歆の弟・翻の家系が北魏で栄華を極める。また西魏のとき、姓を大野氏に代え、北周のときに李姓に復した。

高祖神堯大聖大光孝皇帝諱淵、字叔德、姓李氏、隴西成紀人也。其七世祖暠、当晋末、挾秦、涼以自王、是為涼武昭王。……高生歆、歆為沮渠蒙遜所滅。歆生重耳、魏弘農太守。重耳生熙、金門鎮將、戍于武川、因留家焉。熙生天賜、為幢主。天賜生虎、西魏時、賜姓大野氏……。周閔帝受魏禪、虎已卒、……諡曰襄。襄公生昞、……諡曰仁。仁公生高祖於長安。……（隋）文帝相周、復高祖姓李氏。……（『新唐書』卷一高祖本紀）

李陽冰序が続けて「然自窮蟬至舜、七世為庶、累世不大曜、亦可歎焉」とは、舜の家系が先祖窮蟬から舜まで庶人であつた、という典故を用いたもの。李白の家系が、もとは名家に連なる貴顕の系統ながら、庶人に落ち姓も変えた。ということは、家柄としては烏有に帰したも同然である。そこを、舜になぞらえ莊重さを醸し、レトリックによって救つたかつこうである。

虞舜者、名曰重華。重華父曰瞽叟、……橋牛、……句望、……敬康、……窮蟬、……帝顓頊、……昌意、以至舜七世矣。自從窮蟬以至帝舜、皆微為庶人。

（『史記』卷一五帝本紀）

しかしそもそも隴西李氏と称する唐室自体、家系が偽託されたものだと言われる。沮渠蒙遜に滅ぼされた李歆の子は重耳。その子に熙を掛けるのは付会であると（陳寅恪「李唐氏族之推測」『国立中央研究院歷史語言研究所集刊』三本一分、「李唐氏族之推測後記」同三本四分、「三論李唐氏族問題」同五本二分、「李唐武周先世事蹟雜考」同六本二分）。李陽冰序は、家系付会の用意周到さにおいて唐室に比ぶべくもないが、先祖が中途で苦難の時代を経たことを含め、その仕方を小規模に再現しているようなところがある。

この後、李陽冰序「逃歸于蜀。復指李樹而生伯陽」とは、蜀に逃げ帰った後、再び李の樹を指して姓とし李伯陽が生まれたと、出生と復姓を老子出生譚になぞらえる。『芸文類聚』引く「仙經」という書には、母が金星に感じ妊娠した、李樹のもとで老子を生んだ、生まれると李樹を指してわが姓としようと言った、などという話が伝わる。

老子、姓李、名耳、字伯陽、楚国苦県潁鄉人也。其母感大星而有娠。雖受氣於天、然生於李家、猶以李為姓。……

母到李樹下生老子。生而能言。指李樹曰、以此為我姓。

（『芸文類聚』卷78靈異部上仙道引「仙經」）

出生と復姓の関係について、范伝正序では「公之生也、先府君指天枝以復姓」、李白が生まれるに際し、父が唐

朝の姓を指して復姓した、とわかりやすくなっている。正しくはそのように言うべきところ、李陽冰序は民間に流布していた原話の神秘性を保った表現となっている。復姓について言うと、唐室は李熙の後、天賜、虎、昝、高祖淵へと繋がるのだが、李虎が西魏時に大野氏の姓を賜り、淵が北周時に旧姓に復した。これをも模していると思われる。

白の先祖がもと李姓であったかどうか、本人が言う以上の確かさはない。いずれにしても、ここで李白の出生を老聃になぞらえるのは、唐朝が李姓の故をもつて家系を老子の後に掛ける、その仕方に乗じて本源へと直接的に自身を繋いでいこうとの意図に出たものである。唐室の老子崇拜は玄宗皇帝のとき極点に達する。帝みずから『道德経』の注と疏を書き子庶に頒布、玄宗皇帝廟と崇玄学が設置され、老子玉像が建立、道挙が施行される。その間、帝の老子夢見、臣下による玄宗皇帝降現の報告と繋がっていく。老子に度重なる尊号が贈られ、皇帝自身が神の列位の末に連なる準備がなされる。これらのことが、開元末から天宝初にかけて起こる。李白は長安に召されてその様子をまのあたりにした。離京後には授録をも果たした。こうした王朝との宗教的紐帯に基づいて、家系と出生の条項が書かれている。

研究史②

(三) 入宮

李陽冰序「天寶中、皇祖下詔、徵就金馬。降輦步迎、如見綺皓。以七宝牀賜食、御手調羹以飯之。謂曰、『卿是布衣、名為朕知。非素畜道義、何以及此』。置于金鑾殿、出入翰林中」は、玄宗の下詔と関係部署の詮議、皇

帝拝謁と賜食を経て、翰林供奉となった経緯を述べる。玄宗との親密な関係を言う場面はこの序のハイライトである。彼ひとり主上から礼遇を受けたのか。李白のなかでこう映っているだけで、実際は違ったのか。一連の事柄はどのような制度によるものか。解き明かしたものがない。

このことをめぐる議論は特異な経緯をたどった。李白は進士科に应じていない、その理由は罪人の子孫であるから、あるいは異民族であり商人であるから、というものである。

ウェイリーは、同時代の詩人十二人を含め、李白のみ進士科に应じなかった、主な理由は登第の見こみがなく推薦人も得られなかったためとした。

小川環樹はこれを承けて、科挙には進士と明経があるが、得意分野であるはずの文学の才を問う進士挙に臨まなかったのは、出自の問題が絡んでいるとした。異民族であるか漢族であるかについて、小川氏は漢族であるとの立場をとるが、そのことはおおきな問題ではなく、罪人の子孫であることが影響したと。また彼の父は商人であり、彼自身もそうであったのではないかと推測する（『唐代の詩人』序説10頁）。李白商人説は、つとに詹鏐が触れ（『李白詩論叢』24頁）、やや早く郭沫若も論じている（『李白与杜甫』13頁）。科挙に应じない理由を、罪人の子孫であること、商人であることに求める説は、その後ひろく定着するかに見える（寛文夫『唐宋文学論考』299―300頁）。

松浦友久は、理由を罪人の子孫であることに求めるのは当時の実態にあわず、異民族出身であり商人であることに求めるべきであるとする（『李白伝記論』17頁）。力点の置き所に違いはあるが、問題把握の枠組としては踏襲されている。

考察

論説の発端をなすウェイリーの説において事実の誤認がある。十二人（孟浩然・杜甫・王維・崔顥・王昌齡・李頎・儲光羲・常建・高適・岑參・張九齡・崔曙）のうち、高適は進士科に応じた形跡がない。天寶八載（749）の制科「有道」挙に登第。これ以前にも、開元二十三年（735）の制科に応じ落第したと見られる（孫欽善『高適集校注』高適年譜366頁参照）。

科挙には「進士・明經」の常科のほかに、天子自詔の制科がある。これらの別と実施の詳細について、理解の不足が原因だろう。当時は科挙の研究が充分に進んでいなかった。その他、孟浩然是開元十六年（728）から翌年にかけて上京、挙に応じたと見られるが、詳細は不明。後に韓朝宗によって推薦されようとしたのも常科ではなく制科か。そもそも挙に応じていないことを証明することは難しい。これら諸点については、小川氏の論説においても充分に修正されていない。結果、制科の実際を踏まえない立論となっている。

進士科によらず、天子自詔の制科に応ずる風が当時あった。こちらをめざす人士の裾野は、十二人のサンプルによって拾うことができるものより、はるかにおおきなひろがりをもつであろう。李白はこの制科のひとつ、隠逸を対象とした挙に応じたのではないか。玄宗は南山四皓の綺里季を見る如きであったという。また「道」の義に言い及んでいる。

李白異民族説によって端緒が開かれた詩人像の問題は、罪人の子孫説、商人説へと変遷。科挙制度から閉め出された不遇の詩人という像を導き出した。研究のなかで生じたこれらも、ひとつの李白像であると思ないうる。しかし一部の特徴のみを拡大して本質であるかのように喧伝する仕方、読み手の印象をたよりとして犯人探しを

するような仕方が、詩人にとって正当なものと言えるだろうか。今日の観点から見て、作家の過去や心の深層に創作の秘密を求める探求のあり方は魅力的でない。詩の魅力は、初めて生まれてきたかのようにして、そこに詩句が存在していることではないか。

以上、詩人像の問題についてまとめると、李白自身の思い描いた自己像は、他者によって「偽」が暴かれる。その際にどのようなことが行われているか。偽の部分を剥がし、近似値を求めるように接近を試みる。全体的には実像に近づいている、と評価してよいであろう。しかしその際、詩作品から得た印象が参照される、もしくはそちらに置き換わっている、ということではないか。とすると序の詩人像に導かれて詩集を読むことの妥当性に疑念が生じることになる。

ともあれこの序の記述が神々しさを纏うのは、いま踏みこみつめる聖の領域への展望が反映するからであろう。それはどのような光景であろうか。たとえば神であり先祖でもある老子の加護により、王朝が自今以後、未来永劫にわたって保たれるという、唐朝の構築する世界観にみずからを委ねて得られたもの、と理解してよいのだろうか。あるいは『老子道德経』に「死して亡びざる者は^{いのちなが}寿し」（『唐玄宗御註道德真経』第三十三章『道藏』道神部玉訣類男）、「たとえ人としての生を終わって死に入っても、滅びることのない永遠の道と一体になっている人こそは、まことの長寿者である」（金谷治「死して亡びざる者は寿——『老子』の死生観——『死と運命』22頁」という思想を体得した結果、得られた境地であると考えてよいのだろうか。天宝元年隱逸舉人「高道」科は「道」の体現者を選んだものかと思われる。などという方向に考察してゆく余地がある。いずれにしても、死を目前に

立ち上がったこの自己像は、文集の序に出現するとき、聖性を纏いつつ、集められた作品を一定の方向に読むように誘う。

三 序の詩人像と詩作品

李陽冰『草堂集』十卷は拡張を重ねて現行の『李太白文集』三十卷に至っている。①『草堂集』十巻がもとになって②樂史『李翰林集』二十巻・別集十巻が編まれ、③宋敏求が魏顥所纂『白詩集』二巻・王傳家藏『白詩集』上中二帙その他を合編して三十巻とした。それに④曾鞏の編年の成果をとりこみ、⑤晏知止が版に起こした本が、⑥南宋初に蜀で重刻され『李太白文集』三十巻としていまに伝わる。岩崎静嘉堂と北京図書館に収蔵されるものである。

『草堂集』の体裁がどの程度保たれているかはわからないが、李陽冰序に「凡そ著述する所、言に諷興多し」と言うのは、現行詩集が「古風」から始まるのと歩調を一にする。「古風」其一に、「……聖代復元古、垂衣貴清真。群才屬休明、乗運共躍鱗。文質相炳煥、衆星羅秋旻。……」（巻2）、すなわち皇帝陛下は無為の旨を政治に施され、いま機運に乗じて才能ある士が朝廷に居並んだとは、自身を含む下層の人士が制誥によつて登用されたことを言うだろう。李陽冰序が抛る復古文学史観は彼らの理論的裏づけをなしている（乾「初盛唐期における復古文学史観の形成過程」川合康三編『中国の文学史観』42―45頁）。また魏顥序には李白魏顥応酬作を冒頭に、「大鵬賦・古樂府諸篇」を続けたと言う。確実なことは言えないけれども、現行『李太白文集』に「古風・樂府・歌吟

……」と続く分類の、「古風」、及び「樂府」の半ばほどは、『草堂集』の旧を遺していると考えられることも可能である。文集が十巻から三十巻に拡げられる過程で構成が変わり、全体に醸す風味にも変化が生じていることではあろう。われわれにとって、魏顥序の李白像がより自然に受け入れることができ、李陽冰序の方は違和感がおおきいであろうが、それはわれわれが前者とおなじ俗の側に立っているからである、とも言える。このように考慮すべき要素は多々あるが、ひとまず李白自身が示した詩人像に従って作品を読み進めてみてはどうか。そのことに一定の意義は認められるであろう。

そのように言う一方で、次のようなことも思われる。いま見てきた李白像は、いわば「前方に投射された」像であること。ありのままの自己、というよりは、「かくありたいと願われた」自己像である。李白像生成の秘密は、アイディアルなものに関係していると思われる。序と詩と、こうした傾きがそれぞれのように発現しているのか。その仕組を明らかにする、ということになるのではないかと。実体から遊離した部分、いわゆる「実像」とのずれに秘密があるのではないか。李白像があたかも自成するかに見えるわけは、その「ずれ」を司っている書き手のもくろみが背後にある、ということではないか。「実像」に近づけるのが「研究」の目的であるとしても、そのことだけに向かうのでは不十分であり、なぜ実体を離れた像が生みだされるのか、考えることが重要ではなからうかと。

〈キーワード〉 魏顥、李陽冰、李白像